

# わが国における看護の現象学的研究

## A Study of Adaptation of Phenomenological Approaches in Japanese Nursing Research

吾 妻 知 美

Tomomi AZUMA

The purpose of this study is to review nursing researches with phenomenological approach that has been widely noticed in Japanese nursing studies recently, and to examine the applicability of phenomenology to future nursing researches. Phenomenology is said to be an effective method in describing nursing phenomena. However, nursing researches with phenomenological approach as a mere technique of the research have deviated from fundamental points of phenomenology itself, which originally can grasp nursing phenomena vividly and bring out various experiences of nurses, and we cannot deny the impression that these researches superficially use the terms and concepts of phenomenology. Nevertheless, the phenomenological method of description using “Interactive Interviews” has been suggested as a highly effective method to make experiences of persons who practice nursing activities hidden under unconsciousness come to the open. Nursing studies are requested to search for effective methods that can clarify the characteristics of nursing practices, including “phenomenological approach”, and to avoid sticking to formulate “phenomenological approach” as a study method.

Key words: Phenomenology, Phenomenological approach  
Nursing research, Research Methodology

## I. はじめに

看護をひとつの学問として研究をとおして確立しようとする試みは、Nightingale 以来150年の時を経てきた。わが国でもこの20年来、看護教育の高等教育化と同時に看護学関連の学会の発展とも相まって、看護研究への関心が急激に高まってきた。

しかしながら、種々の看護学会誌を概観しただけでも方法論的にはきわめて多様で、何が看護の独自性なのかという観点からはかなりの不明確さを孕んでいる。当然のことながら、医学の発展とともに開発されてきた看護研究の方法論は自然科学的方法にその根拠を置いてきた。現在一般的に認められている看護研究に関する基準も、科学的方法が研究のプロセスに正確に適用されているかどうかという点にある。わが国の看護研究に多大な影響を及ぼした米国では、1960年以降、看護系大学における大学院教育の発展にともなって、科学的方法論に基づく看護研究は質量ともに世界をリードする勢いで発展しつつある。

しかし、1980年代にはいって米国における看護研究に一つの変化がもたらされた。R. Parse、J. Watson、P. Benner などによって提起された看護における現象学的研究の台頭である。これらの研究者に共通して言えることは、科学的一般論の抽出を旨とする自然科学的方法にかかわって、抽象化ないし一般化によっては明らかにされない個別性や経験の中に潜む意味への接近を試みようとしている点にある。とりわけ、P. Benner の『From Novice to Expert』<sup>1)</sup> がわが国に紹介されて以来、看護者のエキスパート性の問題が注目されるようになった。その後、これまで看護研究の対象とはなりにくかった看護者の「わざ」とか「知恵」に象徴される実践知の立場からの研究への芽生えが随所に見られるようになった。

P. Benner が看護者の実践能力について研究している同時期に、わが国でも看護実践の方法論にこだわった研究者が存在していた。外口<sup>2-4)</sup> は、看護の本質を抽出する方法は科学的な研究方法ではなく、患者との関係性を重視した事例検討にあることを一貫して主張し、「方法としての事例検討」を提起した。池川<sup>5)</sup> は、看護学の方法論を吟味するためには、看護学をどのような性格の学問

として構築しようとしているのか、そして、それらをどのような方法で研究しようとしているのかを明確にする必要があると指摘している。この二人の研究者は、看護学の学的方法論として現象学的視点の有用性を提起すると同時に、看護における看護者の技術やそれを展開する臨床能力に注目している点で共通している。

わが国における「現象学」のムーブメントは、すでに確立した学問領域よりは、むしろ人間学的な視点が重視される臨床的な学問領域、たとえば社会心理学、臨床心理学、臨床哲学などから受け入れられ始めたと言える。このことは、現代社会の問題がますます多様化し、複雑化する中で、既存の画一化した学問では解決困難な側面が顕在化されてきたことを意味している。なかでも、社会心理学者の早坂<sup>6-8)</sup> や哲学者の箱石<sup>9)</sup> はその多くの著書をとおして看護界に多大の影響を与えた。彼らの一貫した問題意識は、客観主義に陥った近代医療における患者を物として対象化すること、患者を単なる管理の対象とみなすことへの批判である。さらに、看護学に対しては患者の人間性への深い洞察に基づく人間学的基盤を必要とすることを踏まえた現象学的研究方法の有用性を示した。

看護学の学的方法論として「現象学」を導入しようとする試みと相まって、1980年代には、心理学者 A. Giorgi による「現象学的アプローチ」と称される研究方法が開発され、看護界にも導入された。こういった手法を用いた看護研究が本来の「現象学」の意図するところを体現できているかどうかについては検討の余地を残している。

そこで本稿では、わが国の「現象学」を背景とした看護研究を概観し、看護における現象学的研究の可能性と課題について考察する。

## II. 看護と現象学

### 1. 現象学とは

現象学研究を概観する前に、「現象学」の語義と歴史について簡単に述べる。「現象学 (Phänomenologie)」という言葉は、ギリシャ語の“現れ”と“倫理 (ロゴス)”とを結びつけて造られたものであるが、もともとは17世紀末から18世紀のはじめに自然科学的研究の分野で使われた比較的新しい言葉である。また、同時期のドイツの哲学者 Kant が感覚の原理を制限する意味で

形而上学の予備学として用いていた。さらに、ドイツ観念論の思潮の頂点に立つといわれる Hegel はその著書『精神現象学』において「意識の経験の学」として、意識が感覚的確信から絶対知にいたる道程として「現象学」を用いた。このように「現象学」の語は多義的に使用されていた。<sup>10)</sup>

20世紀初頭、Husserl が、実証主義にみられる要素還元主義を排し、あくまでも経験の中に、知識の原理として機能する原型を探る哲学的立場をとり、その方法を「現象学」と呼んだ。このことで、「現象学」は哲学のひとつの基本的立場を表明する名称となった。Husserl は、自然科学の隆盛とそれを支える実証主義の台頭により、哲学もまた実証科学に向かったことを批判し、“主観のほうへ方向転換した哲学”として現象学を基礎づけることを目指した。その方法論が、存在が自明視されている客観的世界に“我を忘れて”没入している状態から身を引き離して“我に還る”こと、日常意識が陥っている独断のまどろみ、言い換えれば一切の素朴な確信や科学的先入観から一種の哲学的覚醒をもたらす操作としての、＜現象学的還元＞<sup>註1)</sup>である。そして、その＜現象学的還元＞の核心部分を形作る根本的な方法的手続きが＜現象学的判断停止（エポケー）＞<sup>註2)</sup>であった。Husserl の＜現象学的還元＞は、このような哲学的に覚醒された＜現象学的判断停止＞の遂行により＜超越論的主観性＞<sup>註3)</sup>（Husserl は「理性」と同義でとらえている）という確固とした足場が発見されることによってあらゆる学問や知識の「究極的基礎づけ」の出発点になる、というものである。

その後、Husserl の弟子であった Heidegger は、現存在（人間）の意味へのアプローチを、現象学的記述という独自の方法で、「解釈学」として捉えなおした。この Heidegger の企ては「現象学的解釈学」として展開された。<sup>11)</sup> また、Husserl の正統的な後継者にフランスの哲学者 Merleau-Ponty がいる。Merleau-Ponty は身体を通じて＜生きられた世界（＝生活世界）＞<sup>註4)</sup>の現象学的記述を目指した。そして、その際に注目したのが、主体であると同時に客体でもある＜身体の両義性＞<sup>註5)</sup>であり、身体の世界に住み着かせている＜機能する志向性＞<sup>註6)</sup>であった。Merleau-Ponty は『知覚の現象学』の冒頭で、「現象学は本質の研究であり、いっさいの問題は、現象学に

よれば、結局は本質を定義することに帰結する。また、同時に本質を存在のうちに据えつけなおす哲学でもある」<sup>12)</sup>とその特徴を述べている。

また、哲学者である木田は、「現象学」は完結した一つの理論体系ではなく、開かれた態度であると位置づけている。そして、「この哲学は決して、職業的な哲学研究者の占有物などではありえないであろう。個別科学の研究者をも含めたすべての人がみずからの経験—科学的経験を含めた—統合化をはかり、その意味を問わねばならない、みずから現象学的態度で事象へ向かうことを学ぶべきだ」<sup>13)</sup>と述べている。この意図が示すように、「現象学」は、精神病理学、生理学や比較心理学、社会科学などさまざまな学問領域で適用されている。

同じく哲学者である鷺田は、「現象学はわたしたちの経験のその全体を上空から見下すように分析するのではなく、いつも経験のなかにとどまり、それをいわば内側から切開していく思考だと言われている。だから、とくに“生活”の現場でいろいろな問題に逢着しているひとがその問題じたいを設定する枠組みを組み立てなおす必要を感じているときには、その思考に触手をのばしたくなる」<sup>14)</sup>と指摘する。したがって、看護もまた、患者が経験している痛み、苦しみ、喜びといった“人間のありよう”そのものの相互理解から成り立つ現象であることから、その人間の理解の視点を「現象学」に向けたのは当然の成り行きであろう。

## 2. 看護と現象学

看護は患者と看護者という人間同士の交流を基盤とした相互作用を通して生まれる現象である。それは、目に見えるものでもあるが、見る側・見られる側といった二項対立の方法論や枠組みでは捉えることが出来にくい現象である。なおかつ、従来の自然科学が排除してきた人間の感性や価値を色濃く反映する営みでもある。このような、看護者が経験している現象を探求するために、実践を志向する研究者たちが、看護者の主観を否定せず、ありのままに見ようとする謙虚な態度であり、一般化によって明らかにされない一人ひとりの個に向かう学問であることから、早くか「現象学」に着目したことは不思議ではない。

わが国において、患者理解の視点に現象学的態

度をおいた最初の1人に外口がいる。外口は、実践行為としての看護の基調は、看護者の“気づき”<sup>15)</sup>、看護者の“気持ちと動き”<sup>16)</sup>であると述べ、看護者と患者の関係から立ち現れた体験を事例検討によって丹念に記述し構造化することを試みた。また、高崎<sup>17)</sup>は、現代の看護学の、自然科学を基盤にした医学への追随、心身二元論的な方法論による生活世界との断絶についての矛盾を指摘した。そして、患者を真に理解するため方法として、現象学的な<他者経験>と、看護者の<生活世界>における直接的な了解が必要であると指摘した。

池川もまた、同様の問題意識をもち、「われわれ看護婦は常に、役割の相違やさまざまな先入観や偏見、あるいは自分自身の枠から患者を見、患者に接する危険にさらされているために、そこに患者に対するさまざまな誤解や極解が生じる可能性がきわめて大きい」<sup>18)</sup>と述べ、「相手のことを<了解>するという場合の知り方は、相手の言葉や表情、しぐさなどの表現の中に、自分自身の体験のありかたを見出すことによって、相手の体験しつつある全体の状態への合意が成立する事実をさしている。したがって、看護婦が患者の主観である訴えを、患者自身の主観にもたらし、患者の体験しつつある世界を共有する過程の認識は、患者を1人の<ひと>として<了解>する過程である」<sup>19)</sup>と、<了解>による患者把握の必要性を説いた。さらに、幻影肢痛をもつ患者の体験の理解の過程に関する事例研究を行い、Merleau-Pontyの身体論を根拠にしながら、その意味づけを試みた。<sup>20)</sup>

このように、欧米の看護界で「現象学的アプローチ」が注目される以前に、看護の実践を大事にした看護研究者達からは、看護の学的基盤に関わる方法論に関する問題意識において、現象学的態度の必要性と、「現象学」を用いた研究がなされていた。

### Ⅲ. 研究方法としての現象学的アプローチ

1980年代以降、米国において、「現象学」は人間の生きた経験を研究する方法として、看護専門職にとっての有意義かつ必要な質的研究方法であるといった指摘がなされるようになった。<sup>21)</sup> 看護の出版物においてはじめて「現象学」を看護理

論として取り込んだのは、J. Paterson と L. Zderad である。彼女らはその著書『Humanistic Nursing』<sup>22)</sup>において、看護が患者と看護者の人間関係によって成り立つ援助であることを強調し、Husserl の「現象学」と、宗教哲学者である M. Buber の「実存主義」における人間の本質や信念体系を方法論の基礎におきながら、看護実践の理論を示した。この著作はわが国でも翻訳され紹介され、多くの看護者が「現象学」を知る契機となった。

また C. Oiler の論文「看護研究における現象学的アプローチ」<sup>23)</sup> (The Phenomenological Approach in Nursing Research) は、「現象学」を看護領域の研究方法として紹介した初期のものであろう。その論文の中で C. Oiler は、現象学的記述は看護の中で経験を理解しようとするときに最も効果を発揮すると述べている。そして、現象の記述方法として、現象学的心理学者の H. Spiegelberg と、前述した J. Paterson と L. Zderad の記述方法を紹介した。

「現象学的アプローチ」ということばを概念化したのは、米国の心理学者 A. Giorgi である。彼は、『現象学的心理学の系譜』<sup>24)</sup>において、伝統的な心理学の自然科学的アプローチとは異なった「人格としての生きた人間」への適切なアプローチを確立していくための方法論の必要性を説いている。そして、その方法論として、「現象学」を基礎におく「現象学的アプローチ」を示した。

その後、「現象学的アプローチ」はさまざまな現象学的心理学者によって発展した。特に米国においては、A. Giorgi, P. Colaizzi, H. Spiegelberg, M. Van Manen などにより開発された分析方法を用いた看護研究がなされるようになった。わが国においても、高橋<sup>25)</sup>によって具体的な研究方法として紹介された。高橋は、「現象学的アプローチ」の目標は、理論を発展させたり、概念やモデルを洗練したり、研究結果を一般化した説明の中に統合することではなく、研究によって体験や現象を正確に記述することである、と説明している。さらに、研究である限りは、現象を認識し、研究課題を明らかにし、研究を構造化し、研究計画を立て、データを収集・分析し、研究所見をまとめるという過程を経ると、研究技法としての部分を強調した。高橋の論文においては、「現象学的アプローチ」という研究方法としての

現象学が強調され、「現象学」が本来もつ生き生きとした患者と看護者の交流の中で描かれるべき現象を探究する現象学的態度については深く述べられていない。

さらに、実存的現象学に基礎をおくといわれる R. Parse の看護論が1981年に出版され、わが国にも1985年に翻訳され紹介された。<sup>26)</sup> R. Parse は看護学を、E. Rogers によって開発された統一体としての人間についての理論と概念、Heidegger、フランス哲学者で無神論の実存主義の代表的思想家である Sartre や、Merleau-Ponty の哲学的・実存的思想などの理論を前提におき、看護を医学モデルではない人間科学として位置づけた。さらに、その理論に基づいた現象学的な看護研究の方法を示した。<sup>27)</sup> R. Parse の著作への関心は、The International Parse Interest Group の設立にも証明され、看護者に科学的な方法の代わりに人間的方法を示したという功績は大きい。しかし、一方ではこの概念は高度に抽象的で理論的であるといった指摘もある。<sup>28)</sup>

わが国の「現象学」を用いた研究に影響を与えた一人に P. Benner がいる。P. Benner は、Heidegger の人間に関する現象学的記述を思想的基盤にし、緊急状況におけるパイロットやチェス・プレイヤーの動作や仕事を研究した結果生まれたドレイファス・モデルを応用して、看護者の実践的知識についての記述を試みた。そして、その著書である『達人ナースの卓越性とパワー』<sup>29)</sup> (From Novice to Expert) は、その「現象学的解釈学」を用いた研究方法以上に、看護実践における「初心者」「新人」「一人前」「中堅」「達人」といった熟達レベルの方がわれわれに強いインパクトを与えた。P. Benner は、「現象学的解釈学」について、生きた経験や日々の態度に焦点を合わせているので、実践、意味、存在を体得していくことを研究するのに適しているとその有効性を示した。<sup>30)</sup> そして、その後も現象学的解釈学を用いてさまざまな研究を発表した。P. Benner は、今まで埋もれていた看護者の経験知を記述したその意味を見出そうとしたこと、「現象学的アプローチ」を身近にした点において、わが国でも多くの支持者を得ている。しかし、本来、現象学的研究が意図してきた「生きられる世界」への接近という観点からすれば、かなりの問題を孕んでいるといった指摘もある。

遷延性植物状態患者と看護者との「生きられる世界」の交流を現象学的記述をとおして描き出した西村は、P. Benner の経験知の探究の方法に関して現象学的記述という観点から次のような批判を加えている。長文ではあるが重要な指摘であると考えるのでそのまま引用する。

ベナーによれば習慣的身体におけるいとなみは、その当事者が経験しているまさにその時には意識に立ちのぼってこない、あるいはふり返っても言語化が不可能な経験と説明されている。つまり、彼女にとって実践に埋め込まれている意識されない技能は、言語化できない暗黙の経験なのである。しかしそうであれば、看護婦の熟練技能は経験している看護婦自身によっては語り出せない物になってしまう。

クワントも指摘しているように、私たちが自覚し、語ることでできる経験というのは、生み出された経験の結果であって、生み出されつつそこで起こっていることではないのである。それ故本研究では、動的に生み出され続けている、前意識的な層を言語化するための『実存的分析』を必要としたのである。従って、熟練看護婦の習慣的身体のいとなみを開示するには、こうした次元へと分け入る手だてが必要になる。しかし、ベナーは、その技能が果たせなくなったとき、例えば神経系の障害や運動能力の喪失のためにその技能が失われたとき、こうした技能を身につけているということに気づくことができると述べているのみで、熟練看護婦の習慣的身体の営みを開示する手だてを示していない。これらを考え合わせると、彼女が研究書で紹介している看護婦の技能は、習慣的身体のいとなみを記述していることにはなっていないといえる。<sup>31)</sup>

現象学的方法を用いる意味は、言語化できない達人の実践における「経験」を浮き上がらせることである。P. Benner の著書、『達人ナースの卓越性とパワー』(From Novice to Expert) において、看護実践を「初心者」「新人」「一人前」「中堅」「達人」に分けた。さらに「上級者の看護実践の経験は言語化して記述することができない」<sup>32)</sup> ことを示した。しかし、看護者の「経験」は現象学的方法においても浮かび上がらせることのできない現象なのであろうか。西村が「習慣的営みを記述していることにはなっていない」と指摘しているように、P. Benner らの行ったインタビューや参加観察、解釈、現象学的記述の過程

おいて見出すことができなかったという、方法論の限界ではなかったのだろうか。

#### IV. わが国における現象学的アプローチを用いた研究の課題

わが国において「現象学」という名称を冠した初期の研究に広瀬の「看護学教育における集中的グループ体験のもつ教育的機能に関する研究—現象学的方法を用いて—」<sup>33)</sup>がある。広瀬は、エンカウンターグループを体験した看護学生6名の1年間の成長過程を知るために、面接とアンケート調査を行なった。面接に臨む態度として広瀬は、人間の個別性を尊重し、対象のありのままに近づくためにC. R. Rogersの共感的理解と感情移入を基本的態度を意識した。分析は、R. Parseの示した“The Phenomenological Method”を改変し、①データを何度も精読し、対象者の記載した意図を読み取り、対象者の使っている言葉で述べる ②①に関して再度精読を重ね、研究者の言葉で記述する、という分析段階を示した。結果の記述は、学生個々の面接時期別に「テーマ」をつけてまとめた。

次に、広瀬は同様の手法を用い、透析患者12名の患者の体験世界における、看護面接の機能を明らかにすることを試みた。<sup>34-36)</sup> 面接では、A. Giorgiの示す「現象学的アプローチ」の内的基準により、完全な現象学的態度によって対象者のパースペクティブから対象者の体験の意味を理解すること、を採用した。また、研究のクライテリアは、データに関して別の見解が採用されるかどうかではなく、読み手が研究者によって表現された視点と同じ視点を採用して、研究者が見たことを読み手もまた見ることができるかどうか、同意できるかどうかという基準を示した。結果の記述は、同様に「テーマ」として示した。また、「患者の体験世界」と「面接者」（研究者自身）の二つの世界を記述していた。

広瀬の研究は、わが国ではじめて「現象学」研究であり、看護研究における「現象学」の適用の可能性を示した。しかし、「現象学」という経験世界は、看護者と患者との別々の世界ではなく、両者のかかわりによる間主観的世界での経験であり、その中から立ち上がってくる現象を記述することを意味している。このことを考えると、「患

者の体験世界」と「看護者の体験世界」といった2つの世界を記述することには疑問を抱く。さらに、読み手が研究者と同じ視点でその場面を読み取ることを「テーマ」で記述することによって、生きられた体験が抽象化されることにより、読者が場面を読み取ることを困難にしている感が否めない。

数年のブランクの後、「現象学的アプローチ」を用いた研究がいくつか行われている。杉山らは、学生の言動や記述を、まさにその学生と共にいて、ともに体験して読みとる、といった間主観的な理解の仕方を基本的態度にすえ、学生3名の臨床実習の体験世界をとらえることを試みた。<sup>37)</sup> 分析の手順は、実習指導に関わった教員（研究者）によって学生実習の全体像を記述し、さらに、中心テーマ（中心的関心、課題）を見出すという過程を経て、共同研究者間でディスカッションし、体験世界を再構成して記述したものである。そのディスカッションの目的は、学生の体験の主観的な解釈を脱するための、信頼性と妥当性を保証する手続きとした。

この研究において研究の信頼性と妥当性を保証する手続きにディスカッションが用いられている。前出した広瀬が「読み手が研究者によって表現された視点と同じ視点を採用して、研究者が見たことを読み手もまた見ることができるかどうか、同意できるかどうか」ということに論文の妥当性がある<sup>38)</sup>と述べているように、現象学的研究に関しては、科学的研究の判断基準である信頼性と妥当性、客観性を強調する必要はないと思われる。さらに、中心テーマとしてまとめたことで、学生と研究者との関係性が見えにくい記述となり、一般的な質的記述研究との違いを見出せなくなってしまっている感がある。

朝倉<sup>39)</sup>は、5名の急性心筋梗塞患者の生きられた身体体験をとらえた研究を行った。この論文では、Merleau-Pontyと市川浩の身体論を手がかりにして、対象者の直接体験された生きられる身体理解を試みた。データはケアに参加するなかでの非公式、公式面接のうち、参加者（対象者）の語った言葉のみをデータとして用いた。分析は、Giorgiの分析を朝倉が改変した。具体的には①収集されたデータの大まかな意味を得るために、記述されたデータをとおして読む ②記述されたデータから生きられた身体体験に関連する重要な

陳述を抜粋する ③抜粋した重要な陳述に基づいて、本質的な意味を持つと考えられる単位ごとに分類する ④生きられた身体体験に関する意味の単位すべてを、参加者の体験全体に関する一貫した記述に統合する。ここでは個々の参加者がもつ固有で具体的な主観に忠実に記述する。⑤生きられた身体体験について、全参加者の共通性と相違性について記述し、各参加者を比較することをおして現象のより一般的な意味を見出す、である。その結果＜身体に注意をむけること＞と＜内在的な身体体験＞によって構成された。

しかし、そのテーマを見る限りにおいて患者の身体体験の本質を読み取ることは難しい。朝倉が「生きられた身体体験を記述する言葉が曖昧で、概念としても洗練されたものではない」と述べているが、＜生きられた世界＞をどう記述するかということが、「現象学的アプローチ」の今後の課題であろう。

福島<sup>40)</sup>は、「産褥期の母親の「問いかけ」に対する看護の研究—母乳について問いかけた母親の経験世界の現象学的解釈を通して—」において、看護者が発した言葉や行動の看護が受け手の産褥期の母親にとってどういう意味をもたらすか、母親の経験する世界をありのままに理解することを試みた。そして、対象理解のための態度としては、研究対象者とは「共同研究者」として信頼関係を深めるように関わった。ここでの「共同研究者」とは、自分の経験が探求される理由や意義について母親も納得して、ありのままに言葉とし、そして研究者とともに、看護を考えていくということである。分析は、現象学的心理学の吉田、E. Ken, J. Wertz, M. Van Manenらを参考に解釈した。具体的には①記述されたものを何度も精読する ②自然的態度の停止・保留による現象学的還元 ③言葉に表現する ④想像自由変更 ⑤状況の拡大化・増幅化 ⑥テーマに沿った適切な命名 ⑦母親の経験世界との照合 ⑧構造化するの8段階で行った。この研究で取り上げた場面は一人の褥婦に対する、ある看護師と研究者の一場面ずつの関わりであった。その分析、解釈において、「看護者が母親の問いかけに対して、すぐ忠告や、示唆、説得をするのではなく、まず、看護者が感じた事を表現することで母親が感情を表現できることにつながり、不安や疑問の解決につながる看護としての意味を母親に対してもつという

ことなのである」ということから、母親からの問いかけに対し「じっくり耳を傾けられる状況である」と経験できるような看護者の対応が、母親の不安や疑問を表現し解決に向ける、という結論を見出した。

現象学的態度に重要なのは、先入観にとらわれず、自然的態度によって見ている世界を、現象学的な態度によって、違った側面を見出したり、または現象に迫るものである。そこで、この研究では、その具体的な記述から、現象学的な態度によって母親の訴えに耳を傾けることで、研究者は母親の生きられる世界を体験できたことが示唆される。しかし、「現象学」が一般化によって明らかにされない一人ひとりの個に向かう学問であるという目標を考えたとき、最終的に一般化を求める必要があるかという疑問が残った。

さらに、分析段階に「現象学的アプローチ」を用いた研究もみられる。<sup>41-43)</sup> 従来、看護界において求められてきた医学論文の基準にのっとった場合、方法論を詳しく記述することに限界がある。そのため、著者の意図が十分伝わらなかったかもしれない。しかしながら、これらの論文を読む限りにおいて、「現象学的アプローチ」といった方法論が強調されているだけで、その方法論に近づいているとは言えない印象をうけた。

以上、「現象学的アプローチ」を用いたいくつかの研究を概観した。早坂は、「現象学」はもともとわれわれひとりひとりの主体のありようを徹底的に大事にしていく学問である<sup>44)</sup>と述べ、現象学的態度として患者の見方、看護のあり方についての意義を示した。そして、「ハウ・ツールのなとらえ方はもちろんのこと、技術学的な、おきまりの技術や技法はなく、型にはまった現象学とは、型にはまった人間と同じく、たいして害にもならないが益には一層ならない<sup>45)</sup>と研究方法としての「現象学的アプローチ」の誤った活用に関して注意を喚起していた。

驚田は、看護学における「現象学」の適用の問題について述べている。少し長くなるが引用すると、

看護学という研究分野では、現象学の思考は以前から親しいものであったようだ。現象学的看護学という言葉もよく眼にする。しかし、現象学の思考のその細部を綿密に再構成することなく経験を「ありのままに

とらえる”哲学というふうに大きくとらえるだけでなくに現場に踵を返したり、他方で現象学的還元だとか志向性、ノエマといった操作概念を振りまわして、方法論的な次元でその“応用”が終わるようなむきが少ない。身体性、他者性、受動性、あるいは感覚、運動、時間といった発見的概念をわがものとし、それを駆使して現場と理論のあいだをなんども往復する仕事にはなかなか出会えていない。従来の現象学の問題が看護学の領域でも反復されているような印象を受ける。<sup>46)</sup>

と述べている。これらの指摘に対してわれわれは果たして反論できるだろうか。

また、近年、哲学的な立場から、米国の看護の「現象学的アプローチ」の研究への批判がある。たとえば、「現象学的研究を目指しながら、現象学の根本的な問題提起を理解せずまた、現象学的還元や現象という概念を、本来とは違った意味で捉えている」<sup>47)</sup>、「看護研究に用いられている〈生きられた経験〉の解釈学的研究が Heidegger の存在論と相容れないものを持っている」<sup>48)</sup> といった指摘である。このような批判に立ち向かうためには、「現象学」が単に方法論的な意味合いを持つものではなく、現象学的態度を自己のものとして育み、看護の現象の意味や本質を明らかにするための方法論として確立していくことが必要になってくるのではないだろうか。

このような、看護の「現象学」を用いた研究の批判に対し応えうるものとして西村の研究をとりあげたい。西村<sup>49)</sup>は、遷延性植物状態患者と看護者とのはっきりとは見てとれない関係を知るために、遷延性植物状態患者に関わった看護者の経験をインタビューによって紐解き、さらに、Merleau-Ponty の身体論を手がかりに現象学的記述をおこなった。このインタビューは、一般的な論文におけるデータを取るための手続きとしてのインタビューではない。研究者自身が看護の現場に身をおき、看護者1人ひとりの看護経験に立ち会うことによって、その営みを経験しながら語り合う「対話」である。この「対話」によって、患者と看護者の間に生まれていた間身体的な関係が、そのまま、聴く側である研究者と看護者のあいだにも移行していく。その経験を、研究者のあらかじめ所有していた言葉に組み換えられて、患者と看護者の間に生まれていた間身体的な関係が、

いきいきと記述されたものである。

西村はこの「対話」を介した語りによって、「看護者が経験していたときには自覚できずにいた、あるいは言葉には残してこなかった事実をあるかたちへと組み替えていく可能性がある」<sup>50)</sup>と述べている。ここでの西村と看護者の対話の役割は、「私たちがはっきりとは自覚しないままに普通にしていること、その経験をさまざまな側面との対話を通して気づき確かめていく過程であった」<sup>51)</sup> ということに、経験しているまさにその時には気づかずにいたことを、そしてそれは、P. Benner らがインタビューや参加観察によって抽出することが困難であった経験を、記述することができる方法論としての可能性を指摘することができる。

## V. おわりに

看護はいまだ、自分たちの実践する看護現象を表現し、探求するための研究方法を他の学問領域から模索している段階にある。看護研究の困難さは、人間対人間の間から立ち現れてくる看護の現象そのものが、従来の細分化された諸科学ではまだ説明されないような、反省以前の経験の深みまで分け入らなければ、見ることも、聴くことも出来ないような、〈生きられる世界〉の現象を研究対象としているからだだろう。そこで、「現象学」から学ぶべきことがあるとすれば、これは多くの研究法の中の一技法として、そこにある言語や概念をいたずらに表層的に用いるのではなく、看護という限りなく日常性に依拠した人間的事象に対して、看護研究者がどこまでもその日常的経験の場に留まり、研究者という高みからではなく、研究参加者との共通の地平にとどまり、そこから何が生まれてくるかを読み取る姿勢であろう。このことを肝に銘じて、われわれは常に、ひとつの方法を形式化することなく、看護実践の特徴を浮かびあがらせるような方法を、これからも探究することを続けていくことが必要である。

本研究は、平成12～14年度科学研究費補助金基盤研究 C（研究代表者：池川清子）の助成を受けて作成した報告書の一部を再構成し、加筆訂正を加えたものである。



## 註

註1) あらかじめ与えられている客観的世界に対するあらゆる態度決定、とりわけ世界の存在に対する態度決定をすべて妥当性の外に置くこと（＜禁止すること＞＜通用させないこと＞）。

野家啓一：フッサール—身体と大地のアルケオロジ—，現代思想の冒険者たち00 現代思想の源流，221，講談社，1996。

註2) われわれが日常意識（自然的態度）において自明のものと確信して疑わない眼前に広がる客観的世界の実在性をひとまず括弧に入れてその核心をとりあえず停止し、働かない状態にすることである。それによって、意識から独立した客観的対象（超越的存在）がそのまま存在するという素朴な断定が留保される。現実世界が、主観から離れてそれ自体として客観的に存在するという素朴な信念、日常生活と実証科学とが共有するこの世界に対する「素朴さ」を克服することこそ、還元のも最も重要な目標である。同書，222。

註3) 判断停止によって主題化された、経験的意識から区別された「純粹意識」。

同書，224。

註4) 自然科学の世界と対比的に用いられる。自然科学の世界は精密な法則性によって成り立っている。私たちはそういう世界こそが本当の客観的な世界だと思っている。ところが、自然科学の世界は、私たちがふつうに生活している世界の経験から生まれてくる。後者の世界が生活世界である。生活世界では精密性は成り立っておらず、せいぜいおおよそくらいの法則性しかない。自然科学はこのおおよその法則性を理念化することによって成り立っている。

谷徹：哲学入門者のための基本的用語解説，AERA MOOK 哲学がわかる，185，朝日新聞社，1995。

註5) 両義性とは、存在が本質的に内蔵している二義性のことであって即自でもなければ対自でもなく、客観でもなければ意識でもない、そういう二項対立の手前がわにある、ある矛盾する二契機的動的な錯綜を意味している。

鷲田清一：現代思想の冒険者たち18 メルロ＝ポンティ —可逆性—，322，朝日新聞社，1997。

註6) 志向性とは、意識は絶えず世界あるいは対象に

向かっているものであり、この＜何ものかに向かう＞という意識の根本的なあり方。この意識の作用的側面は「ノエシス」、その对象的側面は「ノエマ」と呼ばれる。ただし、「ノエマ」は現実世界の中に客観的に実在する対象ではなく、体験に内在する志向的对象、簡単にいえば対象の「意味」にはかならない。

前掲書註1)，223。

## 引用文献

- 1) Benner, P : From Novice to Expert, Addison-Wesley Publishing Company, 1984, 井部俊子, 井村真澄, 上泉和子訳：ベナー看護論 達人ナースの卓越性とパワー, 医学書院, 1992.
- 2) 外口玉子：看護実践を通して看護の本質を問う 第一部，看護教育，19（1），4-12，1978.
- 3) 外口玉子：看護実践を通して看護の本質を問う 第二部，看護教育，19（2），70-77，1978.
- 4) 外口玉子：患者との関係において自分の“動き”が問題になるとき—看護婦の行為としての身体，看護，30（4），12-34，1978.
- 5) 池川清子：看護の方法を問い直す，看護展望，3（1），93-100，1978.
- 6) ヴァン・デン・ベルグ，早坂泰次郎：現象学への招待 ＜見ること＞をめぐる断章，川島書店，1982.
- 7) 早坂泰次郎：現象学を学ぶ 患者の世界とナース，川島書店，1986.
- 8) 早坂泰次郎：現場からの現象学 本質学から現象学へ，川島書店，1999.
- 9) 箱石匡行：現象学的看護学の基礎—看護の哲学のために，岩手大学文化論叢，265-283. 1984.
- 10) 廣松渉他編集：岩波 哲学・思想事典，461，岩波書店，1998.
- 11) 野家啓一：フッサール—身体と大地のアルケオロジ—，現代思想の冒険者たち00 現代思想の源流，266-267，講談社，1996.
- 12) Merleau-Ponty, M : PHENOMENOLOGIE DE LA PRECEPTION, Gallimard, 1945, 竹内芳郎, 小木貞孝訳：知覚の現象学 I，みすず書房，I，1967.
- 13) 木田元：現象学，202-204，岩波書店，1970.
- 14) 鷲田清一：臨床のまなざし 現象学のまなざし，西村ユミ，語りかける身体 看護ケアの現象学，255，ゆみる出版，2001.

- 15) 前掲書 2)
- 16) 前掲書 4)
- 17) 高崎絹子：看護の〈他者経験〉をめぐる諸問題，看護展望，4 (9)，33-43，1979.
- 18) 池川清子：看護体験の構造化 看護上の問題点とは何か，看護教育，20 (1)，25，1979.
- 19) 前掲書18)，25.
- 20) 池川清子：身体性としての看護～幻影肢をもった患者とのかかわりを通して～，看護技術，24 (12)，102-113，1978.
- 21) Ray, M：看護現象研究のための哲学的方法，Leinger, M, (Eds), Qualitative Research Methods in Nursing, 106-120, Grune&Stratton, 1985：近藤潤子、伊藤和弘監訳：看護にける質的研究，医学書院，1997.
- 22) Paterson, J, Zderad, L：Humanistic Nursing, John Wiley&Sons, 1976：長谷川浩，川野雅資訳，ヒューマニスティック・ナーシング，医学書院，1983.
- 23) Oiler, C：The Phenomenological Approach in Nursing Research, 1982：佐藤アエ、阿保順子、三浦秀春訳：看護研究における現象学的アプローチ，看護研究，16 (4)，31-38，1983.
- 24) Giorgi, A：psychology as Human Science, Harper and Row, 1979，早坂泰次郎監訳，現象学的心理学の系譜，勁草書房，1980.
- 25) 高橋照子：看護における現象学的アプローチの活用，看護研究，23 (5)，19-24，1990.
- 26) Paese, R：Man-living-health, John Wiley & Sons, 1981，高橋照子訳：健康を一生きる一人間 パースィ看護理論，現代社，1985
- 27) Paese, R：高橋照子訳：現象学と看護，臨床看護，17(2)，261-268，1991.
- 28) Fawcett, J：Analysis and Evaluation of Nursing Theories, F.A.Davis Company, 1993，太田喜久子，筒井真優美監訳：フォーセット 看護理論の分析と評価，25，廣川書店，2002.
- 29) 前掲書 1)
- 30) Benner, P：片田範子他訳：理論と方法としての解釈的現象学，看護研究，23 (5)，25-34，1990.
- 31) 西村ユミ：語りかける身体 看護ケアの現象学，230，ゆみる出版，2001.
- 32) 前掲書 1)，27.
- 33) 広瀬寛子：看護学教育における集中的グループ体験のもつ教育的機能に関する研究－現象学的方法を用いて－，看護研究，23 (5)，57-67，1990.
- 34) 広瀬寛子：看護面接の機能に関する研究 透析患者との面接時過程の現象学的分析 (その1)，看護研究，25 (4)，69-86，1992.
- 35) 広瀬寛子：看護面接の機能に関する研究 透析患者との面接時過程の現象学的分析 (その2)，看護研究，25 (6)，37-62，1992.
- 36) 広瀬寛子：看護面接の機能に関する研究 透析患者との面接時過程の現象学的分析 (その3)，看護研究，26 (1)，49-66，1993.
- 37) 杉山喜代子，鈴木治代，田中悦子，浦田照美，紅林伸幸：臨床実習における学びの諸相 現象学的アプローチによる体験世界の記述，看護研究，31 (3)，39-52，1998.
- 38) 前掲書34)，77.
- 39) 朝倉京子：心筋梗塞を発症した病者の生きられた身体体験，日本看護科学会誌，18 (3)，10-20，1998.
- 40) 福島裕子：産褥期の母親の「問いかけ」に対する看護の研究－母乳について問いかけた母親の経験世界の現象学的解釈を通して－，岩手県立大学看護学部紀要，3，13-22，2001.
- 41) 釜英介：精神分裂病者の病識に対する看護者の理解と態度，こころの看護学，1 (2)，149-155，1997.
- 42) 永井優子，熊澤千恵，山田浩雅他：糖尿病を併せもつ精神病患者の疾病認識に関する研究－その1. 精神科の病気と糖尿病に関する認識に焦点を当てて－，愛知県立看護大学紀要，3，1-10，1997
- 43) 小野寺真紀：萎縮性側索硬化症患者の闘病姿勢の変化－現象学的アプローチを用いた看護婦との相互作用に分析，看護教育研究収録 看護教育学科，25，358-364，1999.
- 44) 早坂泰次郎：現象学への招待〈見ること〉をめぐる断章，78，川島書店，1982.
- 45) 同書，78-79.
- 46) 前掲書14)，258.
- 47) Paley, J：Husserl, Phenomenology and Nursing, Journal of Advanced Nursing, 26, 187-193, 1997.
- 48) Paley, J：Misinterpretive Phenomenology：Hidegger, Ontology and Nursing Research, Journal of Advanced Nursing, 27, 817-824, 1998.
- 49) 前掲書31)

- 50) 西村ユミ：看護ケアの現象学 関わりの中で開かれる植物状態患者との交流，現代思想 12月臨時増刊 総特集現象学 知と生命，133，2001.
- 51) 西村ユミ：看護経験のアクチュアリティを探究する対話式インタビュー，看護研究，36 (5)，45，2003.